

精薄の子の目に輝き

一年生で、一年かかってもかなが一字も覚えられないという知能の劣った子どもがいました。ところが、この子どもに、漢字を教えてみたところ、急にその目が輝き、どんどん覚えたのです。

“雲”と“雪”とをまちがいなく読み分け、“鳥”と“烏”もまちがいなく読み分けました。“門”という字など、ただ一度教えただけなのに、覚えてしまいました。

これには、わたし自身驚きました。しかし、前にも述べたように、記憶するために第一に必要なことは“関心”です。関心がなければ、どんなに学習させても、また学習しているように見えても、実質的には決して学習にはなっていないのです。

知能が低ければ低いほど、抽象能力が劣るものです。したがって、抽象的な文字であるかなには興味が持てず、心がかなに向かないので、「くも」「ゆき」といくら教えたつもりでも、具体的な、あの「空に浮かぶ雲」「降る雪」と結びつかない。ですから覚えられないはずがないのです。

ところが、“雲”や“雪”だと、よく知っている物であり、言葉ですから、“関心”が持てます。“関心”が持てるから、それが心に残って、読めるようになるのです。

つまり、かなの覚えられない精簿記も、漢字ならどんどん覚える。このことをわたしどもは実験によって確かめています。